

山海経研究序説

吉 本 道 雅

序言

現行の『山海経』は、①五臧山経・②海外南経・海外東経・海内南経・海内東経（以下「海外海内経」と汎称する）・③大荒東経・大荒北経・海内経（以下大荒東経・北経の四篇を「大荒経」、海内経を加えた五篇を「大荒海内経」と汎称する）の三つの部分より構成されている。

『山海経』の成書年代、あるいはこの三つの部分相互の関係については、今なお定説がない。⁽¹⁾ 本稿では、これらが前提とする世界観のありかたに注目してこの問題を考察するものとする。

第一章 五臧山經

五臧山經は、南山經（南山首經・南次三經）・西山經（西山首經・西次四經）・北山經（北山首經・北次三經）・東山經（東山首經・東次四經）・中山經（中山首經・中次十二經）の山系ごとの記述になっており、

南山經之首曰騅山、其首曰招搖之山、∴又東三百里、曰洞庭之山、∴又東三百八十里、曰猿翼之山、∴（南山首經）の如く、ある山の記述の次に、「又∴×里、曰×山」という書き出しで次の山を記述することが一貫している。

五臧山經の世界は、山と山を結ぶ山系の集積として示されているわけだが、これとよく似た世界観を提示するものが、『穆天子伝』である。⁽³⁾『穆天子伝』は穆王の遠征路に沿って地名と関連する情報が連ねられる。後代の起居注に類似して干支が記されるが、遠征の最後の部分には、

庚辰、天子大朝于宗周之廟、乃里西土之数、曰、自宗周灋水以西、至于河宗之邦・陽紆之山、三千有四百里。自陽紆西至于西夏氏、二千又五百里、自西夏至于珠余氏及河首、千又五百里、自河首襄山以西、南至于春山珠澤・昆侖之丘、七百里、自春山以西、至于赤烏氏春山、三百里、東北還至于群玉之山、截春山以北、自群玉之山以西、至于西王母之邦、三千里、□、自西王母之邦、北至于曠原之野、飛鳥之所解其羽、千有九百里、□宗周至于西北大曠原、一万四千里、乃還東南、復至于陽紆、七千里、還歸于周、三千里。各行兼数、三万有五千里、

と里数を記述している。ここにもまた地点を結ぶ線の集積としての世界観が提示されている。

『穆天子伝』は、五臧山經の成書年代を考える手掛かりとなる。『穆天子伝』は魏襄王二十年（前二九九）までの年代記である『竹書紀年』⁽⁴⁾とともに、汲冢より出土したので、前四世紀末が成書の下限となる。顧実の比定⁽⁵⁾に従えば、『穆天子伝』

の西征経路は、洛陽を起点に、蠲山（汝氏）・漳水・盤石（平定）・鉏山（井陘）を経て虜沱水北岸に至り、当水（唐河）北岸の犬戎を伐ったあと、險之関（雁門）・焉居を経て河宗の子孫たる酈伯の国（雲中）に至る。地名比定には異論があるが、漳水渡河後、北上して虜沱水に至り、西行して雲中に至る概要は動かない。この経路が戦国趙の領域を専ら通過することは、穆王西征説話が、趙地において第一次的に成立したことを強く示唆する。一体、趙は、武靈王（前三二五）前二九九）以降、北方・西北方進出に政策を転換する。⁽⁸⁾『穆天子伝』には、月（「季夏」などと表示される）・干支が記されているが、一年目の孟秋七月には丁酉34→乙丑02の干支が見え、丁酉から数えて乙丑は29日目となる。従って、この月の朔は丙申33・丁酉34に限定される。

季夏丁卯04 → 癸巳30	孟秋丁酉34 → 乙丑02		
孟秋癸巳30 → 丁酉34	「仲」秋癸亥60 → 乙亥12		
	孟冬壬戌60 → 丁亥24		
	仲冬壬辰29 → 丁酉34		

『穆天子伝』の一年目の「孟秋」は、建寅正月となる前三二二年九月（丁酉34朔）が最も適合的である。⁽⁹⁾『穆天子伝』の月・干支は前三一二→前三二一年の暦譜に適合するが、これは、武靈王十四→十五年に当たり、『史記』趙世家では十四年に「趙何攻魏」とあるだけで、十五年には記事がなく、六国年表趙表は二年とも空欄である。この二年間に『穆天子伝』の原型となった西北遠征が敢行されたものとなる。⁽¹⁰⁾

『穆天子伝』では黄河に沿って漢の隴西郡の西方あたりに至り、そこから「北征」「西征」を重ねて西王母之邦に至るが、ここに見える地名は『山海経』西山経／西次三経にも散見する。すなわち、西次三経現行本の二十二山のうち、2長沙山・5鍾山・8崑崙山・9樂游山・11玉山・13積石山が、『穆天子伝』にも見える。ただし、その順番は、樂都（9樂游

山?）・積石(13)・昆侖(8)・春山(5鍾山)・郡玉之山(11)となり、西王母之邦からの復路に長沙之山(2)が見えるものであり、西次三経とは著しく異なる。

秦の領域を避け黄河に沿って隴西郡西方あたりに至り、西方に向かうルートは、『戦国策』趙一／趙収天下且以伐斉「今魯句注禁常山而守、三百里通於燕之唐・曲吾、此代馬・胡駒不東、而崑山之玉不出也」にもその存在が窺われる⁽¹¹⁾。しかしながら、『穆天子伝』『山海経』がいくつもの地名を共有しながら、その相対的位置関係に甚だしい矛盾を呈するという事実は、これらの地点を恒常的に結ぶ交通路が不安定で、それらに関する情報が個別的にしか獲得されなないといった状況を窺わせる。従って、それらの相対的位置関係に依拠した地名比定に有効性を認めることはほとんど困難であるといわざるを得ない。

『穆天子伝』と五臧山経の先後を考える一つの手掛かりとなるのは、昆侖山をめぐる認識である。

『穆天子伝』では、往路について、「□封膜書于河水之陽、…遂宿于昆侖之阿、赤水之陽、…濟于洋水、…至于黒水」と河水・赤水・洋水・黒水が順次見えるが、昆侖に関係づけられるのは、赤水だけである。昆侖・赤水の関係は、『莊子』外篇／天地「黄帝遊乎赤水之北、登乎崑崙之丘而南望」にも窺われ、一方で、『穆天子伝』も昆侖に「黄帝之宮」があったとする。

これに対し、西次三経では、

西南四百里、曰昆侖之丘、…河水出焉、而南流東注于無達、赤水出焉、而東南流注于汜天之水、洋水出焉、而西南流注于醜塗之水、黒水出焉、而西流于大杆、是多怪鳥獸、

と、河水・赤水・洋水・黒水の四水が全て「昆侖之丘」から発するものとされる⁽¹²⁾。時代を降るにつれて昆侖の神秘性が増大するという推移において、五臧山経が『穆天子伝』より降ることは明らかである。

第二章 海外海内経と大荒海内経

1 方三千里天下説と大九州説

五臧山経と海外海内経・大荒海内経との世界観の最も決定的な相違は、後者が大荒あるいは海外を記述し、海内に対置している点にある。確かに、五臧山経においても、たとえば南山首経最初の離山招搖山につき「臨于西海之上」と、最後の箕尾山につき「其尾踰于東海」とあり、天下の果てに「四海」が想定されているが、海外に対する記述は皆無である。

加えて、海外海内経・大荒海内経では、たとえば海外南経の篇首に「海外自西南陬至東南陬者」とあるように、海外・大荒および海内は四つの「陬」(隅)をもつ方形をなすものとされている。実は五臧山経の末尾にも、

天地之東西二万八千里、南北二万六千里、出水之山者八千里、受水者八千里、出銅之山四百六十七、出鉄之山三千六百九十、此天地之所分壤樹穀也、戈矛之所發也、刀鋌之所起也、能者有餘、拙者不足、封于太山、禪于梁父、七十二家、得失之数、皆在此内、是謂国用、

と、大地を方形とする記述が見えるが、これは劉歆校書の段階で『管子』地数⁽¹³⁾から竄入されたものであろう⁽¹⁴⁾。

方形の大地の観念は、宋襄公(前六五〇～前六三七)の時の制作に係る⁽¹⁵⁾『詩』商頌／玄鳥の「邦畿千里」にすでに見えるが、天下を全体として方形のものとして把握することは、『孟子』梁惠王上の孟子と齊宣王(前三一九～前三〇一)との對話の中に、「海内之地方千里者九」とあるものが初見である。孟子の方三千里九州説は、王畿方千里説に天下九州説を結合したもののだが、実は天下九州説も『詩』商頌／玄鳥「奄有九有」に見える。孟子はその遊歴の最も早い時期に宋にあった。

滕文公下に「万章問曰、宋、小国也、今将行王政、齊楚惡而伐之、則如之何」とあるが、宋王偃の称王は前三二八年のことであり、これが年代の特定できる『孟子』諸章のうち最も早い。宋の称王に際し、殷王朝以来の歴史に関心が高まったことは想像に難くない。宋にあつた孟子は、宋の詩篇である商頌に触発され、方三千里天下説を構築するに至つたものと思われる。⁽¹⁷⁾

「海内」は、『論語』顔淵に見える「四海之内」の略称であり、天下の果てに四海が存在するという觀念は、つとに『詩』小雅／北山「溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣」の「率土之濱」に窺われる。「四海」は語義からいえば、

凡回於天地之間、包於四海之内、天壤之情、陰陽之和、莫不有也、雖至聖不能更也、何以知其然、（『墨子』辭過）

の如く、「天地之間」と同義であり、従つて「海外」は到達不能の絶域であつたはずだが、「海外」の初見例である『詩』商頌／長發「相土烈烈、海外有截」がすでに遠方というほどの意味で用いており、戦国後期には、

四海之内、粒食之民、莫不犒牛羊、豢犬彘、潔為粢盛酒醴、以祭祀於上帝鬼神、天有邑人、何用弗愛也、（『墨子』天

志上）

四海之内、社稷之中、粒食之民、一意同欲、（『晏子春秋』内篇問上／第十二）

の如く「四海之内」は、「粒食之民」すなわち農耕民の居住域である中華を指すことが普通である。上海博楚簡『容成氏』「四海之外賓、四海之内貞」⁽¹⁸⁾の如く、「海外」の異民族もまた天子の影響下にあるものとされた。

これに対し、「四海」ないし「海外」を語義どおりに想定する世界観が出現する。それが、鄒衍の大九州説⁽¹⁹⁾である。『史記』孟子荀卿列伝に、

以為儒者所謂中国者、於天下乃八十一分居其一分耳、中国名曰赤縣神州、赤縣神州内自有九州、禹之序九州是也、不得為州数、中国外如赤縣神州者九、乃所謂九州也、於是有裨海環之、人民禽獸莫能相通者、如一区中者、乃為一州、如此

者九、乃有大瀛海環其外、天地之際焉、

と見える。「儒者所謂九州」が九個で一「州」、「州」は「裨海」に囲まれ、「人民禽獸莫能相通者」であるとされる。「海外」の絶域性は、同じく孟子荀卿列伝の、

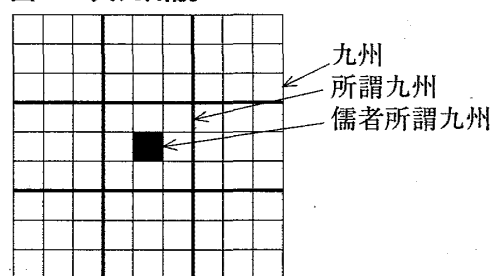
先列中国名山大川、通谷禽獸、水土所殖、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹、

に、より明確に示されている。ここに「海内」を物理的に限定する「四海」とその外の「海外」ないし「大荒」が言説化されることになった。

「儒者所謂中国」を方三千里とすると、「所謂九州」は方九千里、「九州」は方二万七千里となる。

『史記』の記述を無前提に先秦の言説とすることは一般にはできないが、ここで注目されるのは、『呂氏春秋』有始「凡四海之内、東西二万八千里、南北二万六千里」である。この二万八千里・二万六千里が上に推算した二万七千里を調整した数値であることは容易に了解される。騶衍の大九州説が『呂氏春秋』の成書した前二三九年以前に確かに存在した可能性を示唆するものである。

図1 大九州説



2 禹貢

『尚書』禹貢は今日の四川に当たる巴蜀を梁州とする独自の九州説に基づき、前三一六年の秦の巴蜀征服を反映し、秦地において制作されたものと推定されている。⁽²⁰⁾

華陽黑水惟梁州、岷嶓既藝、沱潛既道、蔡蒙旅平、和夷底績、厥土青黎、厥田惟下上、厥賦下中三錯、厥貢璆・鉄・銀・鏤・磬・磬・熊・羆・狐・狸・織皮、西傾因桓是来、浮于潛、逾于沔、入于渭、乱于河、

黑水西河惟雍州、弱水既西、涇属渭汭、漆沮既從、灋水攸同、荊岐既旅、終南惇物、至于鳥鼠、原隰底績、至于豬野、三危既宅、三苗丕敘、厥土惟黃壤、厥田惟上上、厥賦中下、厥貢惟球・琳・琅玕、浮于積石、至于龍門西河、會于渭汭、織皮崑崙、析支渠搜、西戎即叙、：

導崕及岐、至于荊山、：

西傾、朱圉、鳥鼠、至于太華、熊耳、外方、桐柏、至于陪尾、導嶓冢、至于荊山、內方至于大別、岷山之陽、至于衡山、過九江、至于敷淺原、導弱水、至于合黎、餘波入于流沙、導黑水、至于三危、入于南海、導河積石、至于龍門、：

嶓冢導漾、東流為漢、又東、為滄浪之水、過三澨、至于大別、南入于江、：

導渭自鳥鼠同穴、東會于灋、又東會于涇、又東過漆沮、入于河、導洛自熊耳、東北會于澗瀍、又東會于伊、又東北入于河、

の部分は秦地における西方に対する地理的認識を反映する。あらかじめ指摘しておかねばならないのは、

五百里甸服、百里賦納綏、二百里納錙、三百里納結服、四百里粟、五百里米、五百里侯服、百里采、二百里男邦、三百里諸侯、五百里綏服、三百里揆文教、二百里奮武衛、五百里要服、三百里夷、二百里蔡、五百里荒服、三百里蠻、二百里流、

とあるように、禹貢が方千里の甸服を幅五百里の侯服・綏服・要服・荒服が順次取り巻いていく五服説を想定していることである。⁽²¹⁾すなわち禹貢の描く世界は方五千里の方形という枠組みをあらかじめ与えられているのである。この点は、『穆天子伝』や五臧山経のより古拙な世界観と大きく異なる。

禹貢はたとえば崑崙を西戎の一国とするように、『穆天子伝』や五臧山経の神話的要素を極力排しており、その地名はおおむね実在のそれに比定しうる。しかしながら、すでに指摘されているように、⁽²²⁾西方に関しては五臧山経に認められるよう

な架空の材料が用いられている。

方形の大地は、「西被于流沙」とあるように西方の「流沙」に至り、その手前に「華陽黒水惟梁州」「黒水西河惟雍州」とあるように、雍州・梁州の西界として南北に流れる黒水が想定されている。

『穆天子伝』はその帰路において、「鑄以成器于黒水之上、…乙丑、…至于長沙之山、…壬寅、天子飲于文山之下」と、黒水から長沙之山・文山に至ったのち、癸酉10に「千里」の流沙を踏破し、甲戌11巨蒐、乙亥12陽紆の「河水」に到達している。穆王と「流沙」の関係は、『竹書紀年』周紀15「穆王北征、行流沙千里、積羽千里」にも見える。陽紆が『史記』蒙恬列伝「於是渡河、拋陽山、透蛇而北」の陽山に比定されることは異論無く、従つて、この「流沙」は今日のテンゲル沙漠・ウランブフ沙漠あたりを想定している。往路に「流沙」が見えないことは、河西回廊あるいは南山に対する認識を示唆する。

これに対し、西次三経では、上述の如く、河水・赤水・洋水・黒水の四水が全て昆侖之丘に発源するものとし、昆侖から「又西三百七十里、曰楽游之山」を経て、「西水行四百里、曰流沙」とある。

結論的にいえば、禹貢は五臧山経を参照しているものと判断される。まずは流沙が黒水の西にあること、ついで黒水を雍州・梁州の西界とすることは、四水のうち黒水が「西流」し、最も西方に位置するためであろう。三危山は、西次三経では黒水に関係しないが、禹貢が「導黒水、至于三危」と、黒水を三危と関連づけることは、すでに『楚辞』天問「黒水玄趾、三危安在」にも見えるように、三危を四凶放竄の地、西極の山とする觀念を反映するものであろう。さらに注目されるのは、南次三経に「又東五百里、曰雞山、其上多金、其下多丹雘、黒水出焉、而南流注于海」と見える今一つの黒水の存在である。⁽²³⁾禹貢は二つの黒水の一つのものとみなすことで、雍州・梁州の西界を南北に流れ、「入于南海」となる黒水を仮構しているのである。西次三経に見える四水のうち、禹貢が黒水および河水・洋水（漾水）を載せ、赤水を排除したのは、あるい

は上掲『莊子』外篇／天地に窺われるように、赤水がすでに黄帝の神話的記述に組み込まれていたことを嫌ったものであるう。

弱水もまた五藏山経を参照したものと思われる。すなわち、西次四経の終点の崦嵫之山の条に、「西南三百六十里、曰崦嵫之山、…若水出焉、而西流注于海」とあるが、郭璞注によれば、「若水」は一本に「若水」に作ったとある。『大戴礼』帝繫

黄帝居軒轅之邱、娶于西陵氏之子、謂之嫫祖氏、産青陽及昌意、青陽降居泝水、昌意降居若水、昌意娶于蜀山氏、蜀山氏之子謂之昌濮氏、産顓頊、

の「昌意降居若水」を、『今本竹書紀年』黄帝七十七年は「昌意降居弱水」に作り、西次四経の「若水」もまた「弱水」でありえたことは明らかである。「弱水既西」は西次四経の「西流」に基づく。禹貢はこの「若水」＝「弱水」が、西次四経の西端である崦嵫之山に発することに注目して採録したものであろう。西次四経の「若水」は「注于海」とあるが、大地の西辺に「流沙」を想定する禹貢は、これを「餘波入于流沙」に改変したものである。⁽²⁴⁾

3 大荒海内経と海外海内経の原型

(1) 大荒経36章本

大荒海内経は、たとえば、

- (7)⁽²⁵⁾ 有小人国、名靖人、(8) 有神、人面獸身、名曰犁靄之尸、(9) 有滴山、楊水出焉、(10) 有焉国、黍食、使四鳥・虎・豹・熊・羆、(11) 大荒之中、有山名曰合虚、日月所出、(大荒東経)

では、小人国・犁醜之尸・瀟山・焉国・合虚山を記述するが、基本的に「有」が章の書き出しとなっている。各章は基本的には前章との関係を記さずいわば相互に孤立している。こうした基準で大荒海内経を分章すると、大荒東経48章・大荒南経56章・大荒西経74章・大荒北経56章・海内経43章の都合277章となる。⁽²⁶⁾

注目されるのは、(11) 合虚山について「有山」の前にその位置を示す「大荒之中」の一句を冠していることである。こうした位置表現の存在はすでに注目されているが、⁽²⁷⁾ここでさらに指摘すべきは、この種の位置表現をもつ章が、大荒経四篇各14章、海内経16章の都合72章となることである。これがあらかじめ定められた数であることは明らかである。このことが従来留意されなかったのは、この72章の現行本各篇における分布が不規則であったからであろう。72章の数的な計画性と現行本における分布の不規則性という事実は、現行本以前に72章本が存在し、一定の時間が経過するうちに、72章本にそれ以外の章が不規則に挿入された結果と判断される。書物のこのような成立のありかたは、先秦諸文献に頻見するところである。⁽²⁸⁾

この72章は全体としてはなお書式に一貫性がないが、注目されるのは、「大荒之中」など「大荒」を含む位置表現をもつものが、大荒東経・西経・北経に各9章、南経に7章存在することである。これらの章のほとんどは、「大荒…、有山、名曰×」の書式を採り、東2「大荒東南隅有山、名皮母地丘」の如くただその山の存在を記すか、あるいは東3「東海之外、大荒之中、有山名曰大言、日月所出」の如く「日月所×」を附記するだけのものが多い。その点からいって、大荒北経9章のうち、北1a「東北海之外、大荒之中、河水之間、附禺之山、帝顓頊与九嬪葬、…」は顓頊の葬に記述の重点が置かれている点で、また北52a「大荒之中、有衡石山・九陰山・洞野之山」は複数の山を並べている点で異例である。この二章を除くと、大荒東経・西経各9章、南経・北経各7章となる。東経・西経が南経・北経に比べて2章ずつ多いのは、東2「大荒東南隅」・東47「大荒東北隅中」・西1a「西北海之外、大荒之隅」・西74「西南、大荒之中隅」の如く、東経が東南・東北隅、西経が西北・西南隅の山に関する記述を擁するからである。

72章に見出される今一つ一貫した書式としては、東27「東海之渚中有神、…名曰禺𪔐」の如く東南西北各経に1章ずつある「×海」「之」渚中有神、…名曰×」である。これら4章を「大荒…、有山、名曰×」の32章に加えると36章になる。36もまた72と同様に編纂の計画性を窺わせる。現行本の前々段階、72章本の前段階に、36章本がまず存在したのである。36章を以下に掲げると次の如くである。

【大荒東経】

- ① (東2) 大荒東南隅有山、名皮母地丘、
- ② (東3) 東海之外、大荒之中、有山名曰大言、日月所出、
- ③ (東9) 大荒之中、有山名曰合虚、日月所出、
- ④ (東17) 大荒中有山名曰明星、日月所出、
- ⑤ (東26) 大荒之中、有山名曰鞠陵于天、東極、離瞽、日月所出、名曰折丹——東方曰折、来風曰俊——处東極以出入風、
- ⑥ (東27) 東海之渚中有神、人面鳥身、珥兩黄蛇、踐兩黄蛇、名曰禺𪔐、黄帝生禺𪔐、禺𪔐生禺京、禺京处北海、禺𪔐处東海、是為海神、

- ⑦ (東33 a) 大荒之中、有山名曰孽搖顙羝、(b) 上有扶木、柱三百里、其葉如芥、
- ⑧ (東37) 大荒之中、有山名猗天蘇門、日月所生、
- ⑨ (東42) 東荒之中、有山名曰壑明俊疾、日月所出、
- ⑩ (東47) 大荒東北隅中、有山名曰凶犁土丘、应龍处南極、殺蚩尤与夸父、不得復上、故下数旱、旱而為应龍之状、乃得大雨、

【大荒南經】

- ① (南 8) 大荒之中、有不庭之山、榮水窮焉、
② (南 14 a) 大荒之中、有不姜之山、黑水窮焉、(b) 又有賈山、汜水出焉、(c) 又有言山、(d) 又有登備之山、(16 a) 有愬愬之山。(b) 又有蒲山、澧水出焉、(c) 又有隗山、其西有丹、其東有玉、(d) 又南有山、漂水出焉、

③ (南 20) 大荒之中、有山名曰去瘞、南極果、北不成、去瘞果、

④ (南 21) 南海渚中、有神、人面、珥兩青蛇、踐兩赤蛇、曰不廷胡余、

⑤ (南 28) 大荒之中、有山名曰融天、海水南入焉、

⑥ (南 38) 大荒之中、有山名殤塗之山、青水窮焉、

⑦ (南 47) 大荒之中、有人名曰驩頭、鯀妻士敬、士敬子曰炎融、生驩頭、驩頭人面鳥喙、有翼、食海中魚、杖翼而行、維宜芑芑、穆楊是食、

⑧ (南 51) 大荒之中、有山名曰天臺高山、海水入焉、

【大荒西經】

① (西 1 a) 西北海之外、大荒之隅、有山而不合、名曰不周負子、(b) 有兩黃獸守之、

② (西 15 a) 西海之外、大荒之中、有方山者、(b) 上有青樹、名曰柜格之松、(c) 日月所出入也、

③ (西 23) 大荒之中、有山名曰豐沮玉門、日月所入、

④ (西 28) 大荒之中、有龍山、日月所入、

⑤ (西 39) 西海渚中、有神人面鳥身、珥兩青蛇、踐兩赤蛇、名曰弇茲、

⑥ (西 40) 大荒之中、有山名日月山、天樞也、吳姬天門、日月所入、

⑦ (西47) 大荒之中、有山、名曰鑿鑿鉅、日月所入者、

⑧ (西57) 大荒之中、有山名曰常陽之山、日月所入、

⑨ (西66) 大荒之中、有山名曰大荒之山、日月所入、

⑩ (西74) 西南、大荒之中隅、有偏句常羊之山、

【大荒北經】

① (北3) 大荒之中、有山、名曰不咸、

② (北12) 大荒之中、有山名曰衡天、

③ (北18 a) 大荒之中、有山名曰先檻大逢之山、河濟所入、海北注焉、

④ (北26) 北海之渚中、有神、人面鳥身、珥兩青蛇、踐兩赤蛇、名曰禺彊、

⑤ (北27) 大荒之中、有山名曰北極天櫃、海水北注焉、

⑥ (北29) 大荒之中、有山名曰成都載天、

⑦ (北33) 大荒之中、有山名不句、海水入焉、

⑧ (北40) 大荒之中、有山名曰融父山、順水入焉、

「大荒之中」に何らかの位置表現が附加・挿入され、あるいは「大荒之中」が變形を来している梓で囲った部分は、36章本から72章本ないし現行本が形成される過程で二次的に附加され、あるいは転写の際に本来の「大荒之中」が損なわれたものである。傍線を附した個々の章に特有の記述もまた二次的な附加部分とみなされる。

南47だけが山でなく「有人名曰驪頭」であるのは、本来存在した山に関する記述が二次的に脱落したものであろう。また南8・南14 a・西15 a・西28・西74では、「有山名曰×山」ではなく「有×山」になっているが、これも現行本に至る過

図2 大荒経36章本の世界観

①不周負子	⑧融父山	⑦不句	⑥成都載天	⑤北極天櫃	③先檻大逢之山	②衡天	①不咸	⑩凶犁土丘
②方山				④禺彊				⑨壑明俊疾
③豐沮玉門				⑧猗天蘇門				
④龍山				⑦孃搖顓臾				
⑥月山				⑤鞠陵于天				
⑦鑿鑿鉅	⑤弇茲				⑥禺號	④明星		
⑧常陽之山	③合虛							
⑨大荒之山	④不廷胡余				②大言			
⑩偏句常羊之山	①不庭之山				②不姜之山	③去瘞	⑤融天	⑥乃塗之山

程で改変されたものであろう。また東2は「名曰」の「曰」が脱落している。なお袁珂は西74「偏句常羊」を二山の名とするが、複数の山の場合は先に排除した北52 a「有衡石山・九陰山・洞野之山」の如く「山」を一々附けるはずである。

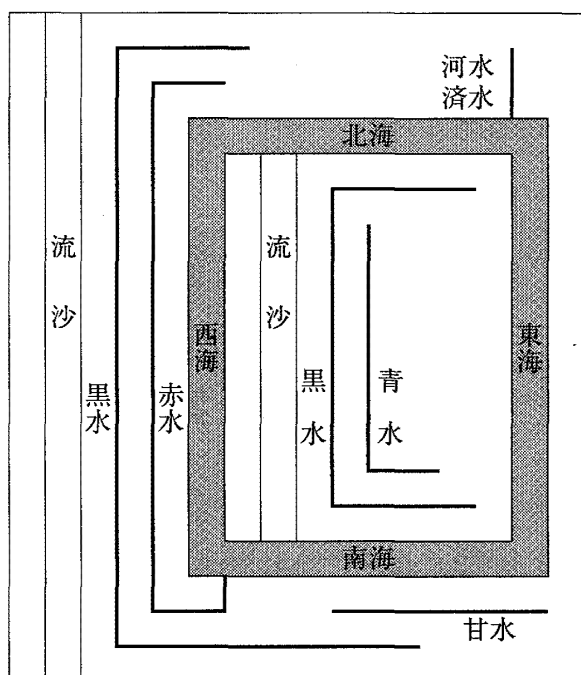
以上36章を図示すると、図2のようになる。大荒経は本来的に、図式化された世界観⁽³⁰⁾を前提に、四荒の32名山と四海の4神を列挙するだけの文献であったことになる。そも現行本の大荒経において「大荒之中」は、それが大荒経に属する以上なくもがな表現といわざるを得ない。36章の段階で存在したものをそのまま存置したものであろう。臆測を逞しくすれば、「大荒之中、有山名曰×」

(2) 大荒海内経72章本

大荒経36章本に対し、大荒東経・西経に各4章、南経・北経に各6章を加えて各14章に揃え、海内経16章を加えたものが大荒海内経72章本である。

附加された36章——以下「新36章」と称し、36章本の36章を「原36章」と称する——の位置表現のみを示すと次の如くで

図3 大荒海内経72章本の世界観



ある。

大荒東経 ①東1 a「東海之外」・②東32 a「海内」・③東44「東北海外」・④東48 a「東海中」
大荒南経 ①南1「南海之外、赤水之西、流沙之東」・②南4「南海之中」・③南5「赤水之東」・④南7「黒水之南」・⑤南45「海中」・⑥南52「東南海之外、甘水之間」

大荒西経 ①西10「西北海之外、赤水之東」・②西16「西北海之外、赤水之西」・③西56 a「西海之南、流沙之濱、赤水之後、黒水之前」・④西68「西南海之外、赤水之南、流沙之西」

大荒北経 ①北1 a「東北海外、大荒之中、河水之間」・②北18 b「其西」・③北46「西北海外、流沙之東」・④北50「西北海外、黒水之北」・⑤北52 a「大荒之中」・⑥北55「西北海外、赤水之北」

海内経 ①内1「東海之内、北海之隅」・②内2「西海之内、流沙之中」・③内3「西海之内、流沙之西」・④内4 a「流沙之西」・⑤内5「流沙之東、黒水之西」・⑥内6「流沙之東、黒水之間」・⑦内7 a「華山青水之東」・⑧内8「西南黒水之間」・⑨内9 a「南海之外、黒水青水之間」・⑩内17「西南」・⑪内21 a「南方」・⑫内29「南海之内」・⑬内33「南方」・⑭内34「北海之内」・⑮内36「北海之内」・⑯内38 a「北海之内」

新36章において最も特徴的なことは、図3の如く、大荒に流沙・黒水・赤水・甘水・河水を、海内に流沙・黒水・青水を配置することによって、原36章の図式的な世界観が克服されていることである。

現行本に従う限り、大荒経72章本の新36章には形式・内容の上で一貫性を見出しがたい。この事實は、36章本を72章本に拡張するというすぐれて計画的な作業とは適合しない。72章本から現行本が形成される過程で、位置表現の後に別の章が二次的に挿入され、さらには錯簡・脱簡が発生したことで、新36章の形式・内容が不統一を呈するに至ったものと思われる。ここで、新36章の本来の記述を復元してみよう。まず、現行本において位置表現のあとに一章しかなく、その一章の中に、本来的に位置表現の直後にあった部分が含まれると判断される章を挙げると次の如くである。72章とは無関係な章と書式を共有する記述は現行本成立までの二次的な附加に係るものと思われる。傍線を附しておく。

【大荒東経】

- ② (東32 a) 海内有兩人、名曰女丑、(b) 女丑有大蟹、

袁珂がすでに指摘する⁽³¹⁾ように、脱文があるようである。

- ④ (東48 a) 東海中有流波山、入海七千里、(b) 其上有獸、状如牛、蒼身而無角、一足、出入水則必風雨、其光如日月、其声如雷、其名曰夔、黄帝得之、以其皮為鼓、橛以雷獸之骨、声聞五百里、以威天下、

【大荒南経】

- ② (南4) 南海之中、有汜天之山、赤水窮焉、

赤水は72章本の世界観の基本的な構成要素である。そのため赤水の終点となる汜天之山が選択されたものであろう。

- ④ (南7 a) 黒水之南、有玄蛇、食麋、(b) 有巫山者、(c) 西有黄鳥、帝藥、八齋、黄鳥于巫山、司此玄蛇、

【大荒西経】

- ③ (西56 a) 西海之南、流沙之濱、赤水之後、黒水之前、有大山、名曰崑崙之丘。(b) 有神——人面虎身、有文有尾、皆白——処之、(c) 其下有弱水之淵環之、(d) 其外有炎火之山、投物輒然、(e) 有人、戴勝、虎齒、有豹尾、穴処、名曰西

王母、此山万物尽有、³²⁾

【海内経】

- ① (内1) 東海之内、北海之隅、有国名曰朝鮮、天毒、其人水居、俚人愛之、
- ② (内2) 西海之内、流沙之中、有国名曰壑市、
- ③ (内3) 西海之内、流沙之西、有国名曰氾葉、
- ④ (内4 a) 流沙之西、有鳥山者、三水出焉、爰有黄金・璿瑰・丹貨、銀鉄、皆流于此中、(b) 又有淮山、好水出焉、
- ⑤ (内5) 流沙之東、黒水之西、有朝雲之国・司儼之国、黄帝妻雷祖、生昌意、昌意降処若水、生韓流、韓流擢首、謹耳、人面、豕喙、鱗身、渠股、豚止、取淖子曰阿女、生帝顓頊、

⑥ (内6) 流沙之東、黒水之間、有山名不死之山、

⑦ (内7 a) 華山青水之東、有山名曰肇山、b 有人名曰柏高、柏高上下于此、至于天、

⑧ (内8) 西南黒水之間、有都広之野、后稷葬焉、爰有膏菽・膏稻・膏黍・膏稷、百穀自生、冬夏播琴、鸞鳥自歌、鳳鳥自儼、靈壽実華、草木所聚、爰有百獸、相群爰処、此草也、冬夏不死、

⑨ (内34) 南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九嶷山、舜之所葬、在長沙零陵界中、

大荒経では、脱文が推定される東32 a 以外の4章は全て山である。山の記述を基調とする原36章を拡張するので、ある意味当然ともいえようが、大荒経の20章の附加もまた山を基調としたことが容易に予測される。位置表現の直後に本来置かれた記述は、まずは現行本において次の位置表現との間に置かれた諸章の中から、山に関わる章を優先的に選ばばよいことになる。

海内経では、山4章・国4章・野1章となっており、位置表現の後に山が置かれたとは限らない。個別的な検討を要する。

以下、残る22章について検討を加えることとする。簡単に判断のつくものはその章だけ掲げる。

【大荒東経】

① (東1 a) 東海之外… (b) 有甘山者、甘水出焉、生甘淵、

甘水は後掲南52「東南海之外、甘水之間」の如く新36章の世界観の構成要素でもあった。上掲南4「南海之中、有汜天之山、赤水窮焉」が赤水に関わるため選択されたと同様の理由で選択されたものであろう。また「有×山者」は、上掲南7 a・内4 aに見え、新36章の特徴的な書式でもある。

③ (東44) 東北海外、又有三青馬・三騅・甘華、爰有遺玉・三青鳥・三騅・視肉・甘華・甘祖、百穀所在、位置表現の後に「又有」を置く東44の書式は異例であり、これも脱文が予測される。傍線部にほぼ一致する表現として、南56「有南類之山、爰有遺玉・青馬・三騅・視肉・甘華、百穀所在」がある。東44の前に本来、「有南類之山」と同様の山に関する記述があったものと思われる。

【大荒南経】

① (南1) 南海之外、赤水之西、流沙之東、… (南3) 有阿山者、南3も「有×山者」の書式をもつ。

③ (南5) 赤水之東、… (南6) 有榮山、榮水出焉、

榮水は原36章の南8「大荒之中、有不庭之山、榮水窮焉」に見える。原36章における同様の記述としては、

(南14 a) 大荒之中、有不姜之山、黑水窮焉、

(南28) 大荒之中、有山名曰融天、海水南入焉、

(南38) 大荒之中、有山名殤塗之山、青水窮焉、

(南51) 大荒之中、有山名曰天臺高山、海水入焉、

(北18 a) 大荒之中、有山名曰先檻大逢之山、河濟所入、海北注焉、

(北27) 大荒之中、有山名曰北極天櫃、海水北注焉、

(北33) 大荒之中、有山名不旬、海水入焉、

(北40) 大荒之中、有山名曰融父山、順水入焉、

がある。72章本が「水」を構成要素とする世界観を構築する過程で附加されたものであろう。

⑤ (南43 g) 又有白水山、白水出焉、而生白淵、昆吾之師所浴也、(南44) 有人曰張弘、在海上捕魚、(南45) 海中有張弘之國、食魚、使四鳥、(南46) 有人焉、鳥喙、有翼、方捕魚于海、(南47) 大荒之中、有人名曰驩頭、鯀妻士敬、士敬子曰炎融、生驩頭、驩頭人面鳥喙、有翼、食海中魚、杖翼而行、維宜芑芑、穆楊是食、(南48) 有驩頭之國、

すでに指摘したように、南47には脱文が推定され、このあたりはかなりの混乱が予想される。南43 g「有白水山、白水出焉、而生白淵」は、東1 b「有甘山者、甘水出焉、生甘淵」に書式上ほぼ一致し、かつ同様のものは大荒経のほかの部分には見出せない。72章本編纂の際にともに収録されたものと思われる。南45「海中」の後には本来「有白水山、白水出焉、而生白淵」があり、錯簡改変を被ったものであろう。

⑥ (南52) 東南海之外、甘水之閒、∴ (南54 a) 有蓋猶之山者、(b) 其上有甘祖、枝榦皆赤、黄葉、白華、黒実、(c) 東又有甘華、枝榦皆赤、黄葉、

【大荒西経】

① (西10) 西北海之外、赤水之東、∴ (西14) 有双山、

② (西16) 西北海之外、赤水之西、∴ (西20 a) 有檣山、(b) 其上有入、号曰太子長琴、顓頊生老童、老童生祝融、祝

融生太子長琴、是処橋山、始作樂風、

「其上」は上掲東48b・南54bに見え、大荒経のほかの部分には見えない。新36章段階における独自の表現となる。「号曰」が大荒海内経ではここ以外に見えないことも、20b「号曰太子長琴」までが20aとともに新36章に含まれていたことを傍証する。

④(西68) 西南海之外、赤水之南、流沙之西、∴(西72) 有大巫山、(西73) 有金之山、
西72・西73のいずれかであろう。

【大荒北経】

①(北1a) 東北海之外、大荒之中、河水之閒、附禺之山、帝顓頊与九嬪葬焉、爰有鴟久・文貝・離兪・鸞鳥・皇鳥・大物・小物、有青鳥・琅鳥・玄鳥・黄鳥・虎・豹・熊・羆・黄蛇・視肉・璿・瑰・璫・碧、皆出衛于山、丘方円三百里、丘南帝俊竹林在焉、大可為舟、b竹南有赤澤水、名曰封淵、c有三桑無枝、d丘西有沈淵、顓頊所浴、

②(北18b) 其西有山、名曰禹所積石、

③(北43) 有山名曰齊州之山・君山・鸞山・鮮野山・魚山、(北44) 有人一目、当面中生、一曰是威姓、少昊之子、食黍、(北45) 有繼無民、繼無民任姓、無骨子、食氣・魚、(北46) 西北海外、流沙之東、有国曰中輻、顓頊之子、食黍、(北47) 有国名曰賴丘、(北48) 有犬戎国、(北49) 有神、人面獸身、名曰犬戎、

北46の少し前に北43がある。現行本において「有山名曰×」の書式が位置表現の直後に置かれない事例は、北43のほか北50・内36の3章であり、異例といふべきだが、後述の如く、北50・内36については位置表現の後に他の章が挿入されたことが推定される。北43は北46「西北海外、流沙之東」の直後から錯簡したものであろう。

④(北50) 西北海外、黒水之北、∴(北51) 有山名曰章山、

上述の如く「有山名曰×」が位置表現の直後に置かれることは異例である。北50の位置表現と北51の間に二次的な挿入が施されたことをあらためて傍証するものとなる。

⑤ (北52 a) 大荒之中、有衡石山・九陰山・洞野之山、(b) 上有赤樹・青葉・赤華、名曰若木、

⑥ (北55) 西北海之外、赤水之北、有章尾山、

【海内經】

⑨ (内9 a) 南海之外、黒水青水之間、有木名曰若木、若水出焉、(b) 有禺中之国、(c) 有列襄之国、(d) 有靈

山、(e) 有赤蛇在木上、名曰蝮蛇、木食、(内10) 有塩長之国、(内11) 有人焉、鳥首、名曰鳥氏、(内12) 有九丘、

以水絡之、名曰陶唐之丘、(内13) 有叔得之丘・孟盈之丘・昆吾之丘・黒白之丘・赤望之丘・参衛之丘・武夫之丘・神

民之丘、(内14 a) 有木、青葉紫莖、玄華黄実、名曰建木、百仞無枝、有九櫚、(b) 下有九枸、其实如麻、其葉如芒、

(c) 大暲爰過、黄帝所為、(内15) 有窋窋、龍首、是食人、(内16) 有青獸、人面、名曰猩猩、

⑩ (内17) 西南有巴国、大暲生咸鳥、咸鳥生乗釐、乗釐生後照、後照是始為巴人、(内18) 有国名曰流黄辛氏、其域中方

三百里、其出是塵土、(内19 a) 有巴遂山、澠水出焉、(b) 又有朱卷之国、(内20) 有黒蛇、青首、食象、

海内經については、山以外にすでに国・野が見えることから、多様な事物が選択された可能性があり、特定は困難である。すでに確認された書式・内容に即していえば、傍線部にはいずれも可能性がある。

⑪ (内21 a) 南方有贛巨人、人面長臂、黒身有毛、反踵、見人笑亦笑、臂蔽其面、因即逃也、(b) 又有黒人、虎首鳥足、

両手持蛇、方啗之、(内22) 有羸民、鳥足、(内23) 有封豕、(内24) 有人曰苗民、(内25) 有神焉、人首蛇身、長如轅、

左右有首、衣紫衣、冠旃冠、名曰延維、人主得而饗食之、伯天下、(内26 a) 有鸞鳥自歌、鳳鳥自舞、鳳鳥首文曰徳、

翼文曰順、膺文曰仁、背文曰義、見則天下和、(b) 又有青獸如菟、名曰園狗、(内27) 有翠鳥、(内28) 有孔鳥、

これは類似の書式が認められず、判断が難しい。

⑫ (内29) 南海之内… (内32) 有山名三天子之都、

内32は「有山名曰×」の書式(「日」が脱落)をもつ。

⑭ (内34) 北海之内、有蛇山者、蛇水出焉、東入于海、

内34は「×水出焉」の書式をもつ。

⑮ (内36) 北海之内、有反縛盜械、帶戈常倍之佐、名曰相顧之尸、(内37) 伯夷父生西岳、西岳生先龍、先龍是始生氏羌、氏羌乞姓、

内37の書式は大荒経のほかの部分に散見し、二次的な附加に係ることは明らかである。

⑯ (内38 a) 北海之内、有山名曰幽都之山、黒水出焉、(b) 其上有玄鳥・玄蛇・玄豹・玄虎・玄狐蓬尾、

「有山名曰×」の書式をもつ。黒水は新36章の世界観の重要な構成要素である。

(3) 海外経図72章・海内経図72章

海外海内経は、袁珂の分章に従えば、海外南経22章・西経21章・北経21章・東経15章、海内南経17章・西経22章・北経31章・東経10章となる。⁽³³⁾ 海外経四篇・海内経四篇の章数は不均衡だが、その合計は海外経80章・海内経80章で一致する。この分章に無批判に従うわけにはいかないが、海外経・海内経の章数が均衡していることは、計画的な編纂を予測させる。

海外海内経を大荒海内経と比較した場合にただちに気付かれるのは山の数の著しい少なさである。一体、海外海内経は、

海外自西南陬至東南陬者、結匈国在其西南、…南山在其東南、…比翼鳥在其東、…(海外南経)

の如く、ある事物に関する記述は、「在其×」の如き前の事物からの方角を記すことが通例だが、山については、

狄山、帝堯葬于陽、帝嚳葬于陰、爰有熊・羆・文虎・雌・豹・離朱・視肉、吁咽、文王皆葬其所、一曰湯山、一曰爰有熊・羆・文虎・雌・豹・離朱・鷗久・視肉・虔交、其范林方三百里、(海外南經)

務隅之山、帝顓頊葬于陽、九嬪葬于陰、一曰爰有熊・羆・文虎・離朱・鷗久・視肉、(海外北經)

蒼梧之山、帝舜葬于陽、帝丹朱葬于陰、(海內南經)

流沙出鍾山、西行又南行昆侖之虛、西南入海黑水之山、(海內西經)

蛇巫之山、上有人操柸而東向立、一曰龜山、(海內北經)

の如く、この通例から外れ、その前後の事物との相対的な位置関係を記さない事例が少なくない。これらの記述が二次的に附加挿入されたものであることは明らかであろう。こうした次第で山の数はいよいよ少なくなる。

海外海内經が何らかの図を前提とする記述であったことはつとに指摘されているが、⁽³⁴⁾結論的にいえば、その「海外海内經図」は、海外・海内の四方にそれぞれ18個、すなわち海外・海内にそれぞれ72個の画像を配置したものであったと思われる。この図には、72個の画像とは別に山川も描かれていた。「海外海内經図」が文章化されたものが現行本海外海内經だが、その際に、本来は画像に数えない山もほかの画像と同様に文章化されたものであろう。たとえば、

南山在其東南、自此山来、蟲為蛇、蛇號為魚、一曰南山在結匈東南、(海外南經)

など、「在其×」をもつ山がその事例である。この文章化の過程で、本来「海外海内經図」に無関係だった山の記述も加えられた。それが上掲の位置関係の見えない事例である。

すでに指摘されているように、海外海内經の錯簡は甚だしく、⁽³⁵⁾それ以前に文章化の段階で画像が誤解されたことが現行本の如き不均衡をもたらしたものと思われる。さらに、上掲の南山の事例では、「在其東南」に対して「在結匈東南」に作る異本を提示するが、このように「其」ではなく具体的な事物を記す事例の少なくとも一部は、「其」の曖昧さを嫌って伝承

本の段階で加筆されたものと思われ、こうした場合、錯簡が固定してしまうこともありえたであろう。⁽³⁶⁾ 本来の海外海内図のありかたを推定すれば、それは図4のようなものであったと思われる。各篇ごとに説明しておこう

【海外南経22章】山に関わる南山・昆侖虚・狄山の3章と「南方祝融、獸身人面、乘兩龍」の1章の都合4章を除けば18章となる。四方神に関する記述は、「在其×」の書式をもたず、やはり二次的な附加部分であると思われる。

【海外西経21章】袁珂は滅蒙鳥・大運山を併せて1章とするが、「滅蒙鳥在結匈国北、為鳥青、赤尾、大運山高三百仞、在滅蒙鳥北」の書式から2章となるはずであり、西経は実は22章である。山に関わる大運山・窮山の2章とつとに錯簡が指摘されている龍魚陵居・白民国・肅慎国3章および西方蓐收1章を除いて16章、女祭・女戚と鳶鳥・鷦鷯をそれぞれ1画像1章として各2章と数えれば18章となる。

【海外北経21章】山に関わる禹所積石山・務隅之山・平丘の3章および北方禺彊1章を除けば17章となる。北海諸獸の一章には4個の獸があり、4画像で4章と数えられる。海外北経現行本は「海外自東北陬至西北陬者」に作るが、最初の無繫之国が「在長股国東」と、海外西経最後の長股国に連続しているので、実際には西北から東北に並んでいる。従って最後の北海諸獸は東北隅にあったことになる。図が4画像のうち駒騄・駮を北、蛭蛭・羅羅を東に含めたものとすれば、18章となる。

【海外東経15章】山に関わる騂丘の1章および東方句芒の1章を除き、現行本では海外北経に属する蛭蛭・羅羅の2章および錯簡に係る海外西経の龍魚陵居・白民国・肅慎国3章を加えれば18章となる。

【海内南経17章】「甌居海中、閩在海中」を2章、「伯慮国、離耳国、雕題国、北朐国」を4章、「匈奴⁽³⁷⁾、開題之国、列人之国並在西北」を3章と数えれば23章となる。山に関わる三天子鄩山・蒼梧山の2章を除き、「在西北」とある匈奴・開題之国・列人⁽³⁷⁾之国の3章を西経に移せば18章となる。

【海内西経22章】海内北経に重出する貳負之臣曰危の1章、山に関わる鴈門山・鍾山の2章、錯簡に係る東胡⁽³⁸⁾・夷人・貊国・孟鳥の4章、昆侖之虚に関わる11章を除き、南経に属する匈奴・開題之国・列人之国の3章、北経に属する「昆侖虚南所」は西経の海内昆侖之虚の南であれば西経に属するはずなので、そこに見える氾林・冰夷・王子夜之尸・宵明・燭光の5章を西経に加え、さらに東経に錯簡している国在流沙中者・国在流沙外者・西胡白玉山の3章のうち、前2章に属する埵端・璽喚・大夏、豎沙・居繇・月支之国を6章と数えたと18章となる。

【海内北経31章】山に関わる蛇巫之山・帝堯臺以下四臺の2章を除き、「昆侖虚南所」に属する上掲の5章を西経に、蓋国以下の10章を東経に移す。西王母と三青鳥、大行伯と貳負之尸、犬封国と文馬、大蜂と朱蛾をそれぞれ2画像2章とすれば18章となる。

【海内東経10章】錯簡に係る国在流沙中者・国在流沙外者・西胡白玉山の3章、山に関わる都州・琅邪臺・会稽山の3章を除く。現行本では海内西経に置かれる東胡以下4章、北経に置かれる蓋国以下10章を加え、蓋国・倭、朝鮮・列陽をそれぞれ2章に数え、山に関わる列姑射・蓬萊山を除けば18章となる。

図4 海外海内経図の世界観

		①無縈之國	②燭陰	③一目國	④柔利國	⑤共工之臣相柳氏	⑥深目國	⑦無腸之國	⑧聶耳之國	⑨夸父	⑩博父國	⑪拘纓之國	⑫尋木	⑬跂踵國	⑭歐絲之野	⑮三桑無枝	⑯范林	⑰駒駘	⑱駁	
		①西王母	②三青鳥	③闕非	④據比之尸	⑤環狗	⑥祿	⑦戎	⑧林氏國	⑨大行伯	⑩貳負之尸	⑪大封國	⑫文馬	⑬鬼國	⑭狗犬	⑮窮奇	⑯大蜂	⑰朱蛾	⑱蟪蛄	
⑱長股之國	⑱燭光																		①孟鳥	⑱蜚蜚
⑰諸天之野	⑰宵明																		②貊國	⑰羅羅
⑯軒轅之國	⑯王子夜之尸																		③夷人	⑯肅慎之國
⑮女子國	⑮冰夷																		④東胡	⑮白民之國
⑭并封	⑭汜林																		⑤鉅燕	⑭龍魚陵居
⑬巫咸國	⑬匈奴																		⑥蓋國	⑬勞民國
⑫女丑之尸	⑫開題之國																		⑦倭	⑫毛民之國
⑪丈夫國	⑪列人之國																		⑧列陽	⑪玄股之國
⑩鷓鴣	⑩月支之國																		⑨朝鮮	⑩雨師妾
⑨鳶鳥	⑨居蘇																		⑩射姑國	⑨扶桑
⑧女戚	⑧豎沙																		⑪大蟹	⑧黑齒國
⑦女祭	⑦大夏																		⑫陵魚	⑦豎亥
⑥形天	⑥蜃喚																		⑬大鰲	⑥青丘國
⑤奇肱之國	⑤埤端																		⑭明組邑	⑤天吳
④一臂國	④大澤																		⑮大人之市	④垂垂
③三身國	③高柳																		⑯雷神	③君子國
②夏后啟	②流黃鄴氏之國																		⑰韓鴈	②奢比之尸
①滅蒙鳥	①后稷之葬																		⑱始鳩	①大人國
		⑱旄馬	⑰巴蛇	⑯氏人國	⑮建木	⑬契窳龍首	⑫夏后啟之臣孟涂	⑪犀牛	⑩兕	⑨汜林	⑧泉陽國	⑦北胸國	⑥離題國	⑤離耳國	④伯慮國	③桂林八樹	②閼	①甌		
		①結匈國	②比翼鳥	③羽民國	④二八	⑤畢方鳥	⑥謹頭國	⑦厭火國	⑧三株樹	⑨三苗國	⑩載國	⑪貫匈國	⑫交脛國	⑬不死民	⑭岐舌國	⑮鑿齒	⑯三首國	⑰周饒國	⑱長臂國	

第三章 『山海経』の成立

1 成書年代

上述の如く、五臧山経の成書は、およそ前四世紀末、前三一一―前二九九年の間に成書した『穆天子伝』よりは下り、五臧山経とは隔絶した世界観をもつ海外海内経・大荒海内経の成書はさらに下ると思われる。

この年代観は、『山海経』に特徴的な表現によっても傍証される。すなわち、

有草焉、其状如韭而青華、其名曰祝餘、食之不飢、（南山経）

肅慎之国在白民北、有樹名曰雄常、先入伐帝、于此取之、（海外西経）

東海之外、大荒之中、有山名曰大言、日月所出、（大荒東経）

傍線部の「有×、名曰×」は五臧山経・海外海内経・大荒海内経ともに頻見するところだが、『山海経』以外の先秦諸文献における同様の用例は次の如くである。

北冥有魚、其名為鯢、…有魚焉、其広数千里、未有知其脩者、其名為鯢、有鳥焉、其名為鵬、（『莊子』内篇／逍遙遊）

辺竟有人焉、其名為竊、（『莊子』外篇／天道）

南方有鳥、其名鵷鵠、（『莊子』外篇／秋水）

南越有邑焉、名為建德之国、…東海有鳥焉、名曰意怠、（『莊子』外篇／山木）

南方有鳥焉、名曰蒙鳩、…西方有木焉、名曰射干、（『荀子』勸学）

空石之中有人焉、其名曰鰕、(『荀子』解蔽)

有其状若人、蒼衣赤首、不動、其名曰天衡、有其状若懸釜而赤、其名曰雲旂、有其状若衆馬以鬪、其名曰滑馬、有其状若衆植華以長、黃上白下、其名蚩尤之旗、(『呂氏春秋』明理)

餘瞽之南、南極之崖、有菜、其名曰嘉樹、其色若碧、(『呂氏春秋』本味)

北方有獸、名曰蹶、(『呂氏春秋』不広)

「有×、名為×」まで含めておおむね前四世紀末から前三世紀中葉までに特有の句法であることが了解されよう。『山海經』の成書地域については、立ち入った議論は控えざるを得ないが、少なくともこの句法が、齊・魯の東方や楚ではなく、むしろ宋・三晋・秦といった中原や西方に限ってもつばら見えることは指摘しておく。

さらに、海外海内經・大荒海内經の成書年代を考える上で注目されるのは前二三九⁽³⁹⁾年に成書した『呂氏春秋』である。『山海經』との対応が集中的に認められる篇としては、論大・本味・任数・求人がある。

地大則有常祥、不庭、岐母、群抵、天翟、不周、(論大)

肉之美者、猩猩之脣、獾獾之炙、雉臠之翠、述蕩之踏、旄象之約、流沙之西、丹山之南、有鳳之丸、沃民所食、魚之美者、洞庭之鱖、東海之鮓、醴水之魚、名曰朱鰈、六足、有珠百碧、藿水之魚、名曰鱈、其状若鯉而有翼、常從西海夜飛、游於東海、菜之美者、崑崙之蘋、寿木之華、指姑之東、中容之國、有赤木玄木之葉焉、餘瞽之南、南極之崖、有菜、其名曰嘉樹、其色若碧、陽華之芸、雲夢之芹、具區之菁、浸淵之草、名曰土英、和之美者、陽樸之薑、招搖之桂、越路之菌、鱣鮪之醢、大夏之塩、宰揭之露、其色如玉、長澤之卵、飯之美者、玄山之禾、不周之粟、陽山之稌、南海之稻、水之美者、三危之露、崑崙之井、沮江之丘、名曰搖水、日山之水、高泉之山、其上有涌泉焉、冀州之原、果之美者、沙棠之實、常山之北、投淵之上、有百果焉、群帝所食、箕山之東、青島之所、有甘櫨焉、江浦之橘、雲夢之柚、漢上石

耳、所以致之馬之美者、青龍之匹、遺風之乘、（本味）

其以東至開梧、南撫多顙、西服壽靡、北懷儋耳、若之何哉、（任数）

禹東至樽木之地、日出、九津、青羌之野、攢樹之所、抵天之山、鳥谷、青丘之鄉、黑齒之國、南至交趾、孫樸、續櫛之國、丹粟、漆樹、沸水、漂漂、九陽之山、羽人、裸民之處、不死之鄉、西至三危之國、巫山之下、飲露、吸氣之民、積金之山、共肱、一臂、三面之鄉、北至人正之國、夏海之窮、衡山之上、犬戎之國、夸父之野、禺彊之所、積水、積石之山、（求人）

傍線部については、表現には出入りがあるものの、『山海經』現行本との対応が認められる。⁽⁴⁰⁾ 対応が集中的に認められ、しかもその対応箇所が五藏山經・海外海内經・大荒海内經にあまねく及ぶという事実は、これら三つの部分を含んだ『山海經』がすでに基本的に成立し、四篇の編者がその内容を参照する便宜を有していたことを示すものである。ばらばらの原資料から引用したものが結果的に現行本『山海經』に対応するものが多かったといった偶然を想定することは不都合である。表現の出入りは編者による咀嚼を意味するものとなる。

本味「群帝所食」の「群帝」は、ほかの先秦諸文献では大荒南經・大荒北經に各一例見えるだけである。また「流沙之西」とあるが、「流沙之×」なる位置表現も大荒海内經特有の表現である。有始に「何謂六川、河水、赤水、遼水、黒水、江水、淮水」と赤水・黒水を特筆することとともに、上述の如く大荒經72章本において構築された世界観に呼応するものである。また、

凡四極之内、東西五億有九万七千里、南北亦五億有九万七千里。極星与天俱游、而天極不移、冬至日行遠道、周行四極、命曰玄明、夏至日行近道、乃參於上、当枢之下無昼夜、（有始）

は、

帝命豎亥步、自東極至于西極、五億十選九千八百步、豎亥右手把算、左手指青丘北、一曰禹令豎亥、一曰五億十万九千八百步、（海外東經）

を踏まえた上で、「歩」を「里」に改めたものと思われる。

現行本『山海經』の基本的な部分は、前二九九〜前二三九年の間の六十年間に形成されたものといつてよからう。

2 成書過程

ここでは、世界観の展開という視点から、とくに海外海内經・大荒海内經の成書過程を簡単に展望しておくことにする。

（1）大荒經36章本

大荒海内經の最古の原型は大荒經36章である。大荒の32山および四方神を扱う都合36章から成るわけだが、32は「儒者所謂九州」に相当する区画81個から成る天下の最外辺32個を取り出したものである。孟子の方三千里九州説↓鄒衍の大九州説↓大荒經36章には世界観の継起的展開が認められるのである。

（2）海外図72章・海内図72章

大荒經36章がもつばら山に関わる記述であつたのに対し、海外図72章・海内図72章はむしろ山以外を記述する。その点において両者に重なるところはないし、実際に大荒經36章に海外海内經との記述の重複は認められない。しかしながら、海外・海内を各72個の事物によつて描く海外海内図の世界観には、大荒Ⅱ海外を36章で記述した大荒經36章本の少なくとも間接的な影響を認めざるを得ない。ここで強調したいのは、72という数が、大九州説からは直接には導かれないことである。

大九州説の最外辺たる32に四方神の4を加えたものが36、それを2倍したものが72なのである。

(3) 大荒海内経72章本

大荒海内経72章本は、大荒四経各14章、海内経16章から成る点でこれも大九州説とはすでに全く乖離したものである。72なる数をもっぱら留意されている。大荒経36章をもっぱら山を扱うものであったことに対し、海内経が山以外の事物を取り入れていることは、世界観の転換といつてさえよい。転換の有力な契機として、もっぱら山以外の72の事物で海外・海内を描く海外海内図の少なくとも間接的な影響を挙げることは不当ではあるまい。

大荒経72章本の成立に際して考慮すべきは禹貢との関係である。上述の如く、72章本の段階で附加された新36章の世界観において最も特徴的なことは、大荒に流沙・黒水・赤水・甘水・河水を、海内に流沙・黒水・青水を配置することによって、原36章の図式的な世界観が克服されていることである。大荒・海内それぞれに流沙・黒水が相似的に存在するが、ともに流沙が西辺をなし、その東に黒水が位置し南北に流れることは禹貢に同じく、偶然の一致ではあり得ない。上述の如く、流沙・黒水を西辺とする言説の発生は、方五千里の方形という禹貢の世界観に動機づけられたものであり、そのことは、大荒海内経の禹貢引用を示唆する。方五千里の「海内」に限定された禹貢に対し、「海外」たる大荒を擁する大荒海内経の世界観がより発展したものであることや、禹貢における神話的要素の忌避も、禹貢の先行を支持する。

さらに、大荒海内経現行本まで考慮すると、禹貢の影響はより顕著である。大荒西経／昆侖西王母

(a) 西海之南、流沙之濱、赤水之後、黒水之前、有大山、名曰昆侖之丘、(b) 有神——人面虎身、有文有尾、皆白——
 处之、(c) 其下有弱水之淵環之、(d) 其外有炎火之山、投物輒然、(e) 有人、戴勝、虎齒、有豹尾、穴处、名曰西王母、此山万物尽有、

の(c)が72章本の段階から(a)に連なっていたか、それとも現行本成立までに附加されたものか、当面確言できないが、弱水が特筆されることは、やはり禹貢の影響とみなしえよう。

さらに、禹貢は、「導河積石」と、禹が河水を積石山に引いたことをいう。西次三経においても確かに、「又西三百里、曰積石之山、其下有石門、河水冒以西流」と河水と積石山を関連づけるが、禹との関係はいわない。これに対し、

(a) 大荒之中、有山名曰先檻大逢之山、河濟所入、海北注焉、(b) 其西有山、名曰禹所積石、(大荒北経)
の(b)は積石山を禹と関連づける。これまた禹貢の影響とみなしえよう。

(4) 現行本海外海内経・大荒海内経

現行本海外海内経は、海外海内図に対する解釈を文章化すると同時に、件数はさほど多くないが、山に関する記述を附加している。これは一面では72章という数的合理性の放棄である。

海外海内経につき特筆すべきは、昆侖に関する記述の充実である。海外南経の「昆侖虚」とは別に、海内西経には「海内昆侖之虚」があり、袁珂の分章ではそれ以下の11章が昆侖に関わる。ほかに「流沙」についても、「西行又南行昆侖之虚」とあり、さらに海内北経では、西王母とその南の三青鳥が「在昆侖虚北」、帝堯臺等四臺が「在昆侖東北」、ついで「昆侖虚北所有」として闕非以下6章、⁽⁴¹⁾「昆侖虚南所」として汜林以下5章が置かれている。さらに海内東経に錯簡している国在流沙中者・西胡白玉山についても、「昆侖虚東南」と見える。現行本海外海内経は、海外海内図に依拠しつつも、海内の西北隅に巨大な昆侖複合体を創作するに至っているのである。海内昆侖之虚の、

海内昆侖之虚、在西北、帝之下都、昆侖之虚、方八百里、高万仞、上有木禾、長五尋、大五围、面有九井、以玉為檻、面有九門、門有開明獸守之、百神之所在、在八隅之巖、赤水之際、非仁羿莫能上岡之巖、赤水出東南隅、以行其東北、

河水出東北隅、以行其北、西南又入渤海、又出海外、即西而北、入禹所導積石山、洋水・黒水出西北隅、以東、東行、又東北、南入海、羽民南、弱水・青水出西南隅、以東、又北、又西南、過畢方鳥東、

なる記述は、一見して明らかなように、上掲の西次三経／昆侖之丘に弱水・青水が加わり六水となっている。弱水が加えられたのは、禹貢の影響であろうし、黒水につき「南入海」とあるのも、禹貢の「入于南海」を踏まえたものであろう。禹貢の影響は、

禹所積石之山在其東、河水所入、（海外北経）

河水出東北隅、以行其北、西南又入渤海、又出海外、即西而北、入禹所導積石山、（海内西経）

と、禹と積石山を関連づけている点にも確認できる。

現行本大荒海内経もまた72章の枠組みを放棄し、277章に増加している。様々な材料が附加された結果、今日の如き無秩序な外観を呈するに至っているのであり、ここには海外海内図から海外海内経への附加と同様の志向を見出すことができる。

結語

現行本『山海経』のうち、海外海内経・大荒海内経については、その原型としての海外海内図・大荒経36章本・大荒経72章本の存在が推定できる。これらを媒介項とし、またそれぞれの反映する世界観を考慮して『山海経』の成書過程を整理すると、①五臧山経、②大荒経36章本、③海外海内図、④大荒経72章本、④海外海内経、⑤大荒海内経の先後関係が推定でき

る。

現行本海外海内經・大荒海内經の間には一定の記述の重複が認められるが、それは引用関係というほどには忠実なものではない。⁽⁴²⁾とりわけ大荒經72章本以降においては五臧山經をも含む先行資料群を想定し、それらから随時に引用されたと考えた方がよいのかもしれない。⁽⁴³⁾

ここに推定した成書過程は、上述以外のいくつかの材料によっても傍証される。いくつか取り上げておこう。

まずは四方神である。⁽⁴⁴⁾『左伝』昭二十九には、「木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土」と五行に対応する五正が見えるが、『礼記』月令（および『呂氏春秋』）の四方・中央の神はこれを四時に対応させたものであり、『尚書大伝』鴻範五行伝や『漢書』律曆志にも踏襲されていく。大荒經がこれらとは全く独自の四方神をもつのに対し、海外經は北方は大荒經と同じ禺彊だが、東・南・西方は月令と同じ神を掲げるに至っている。大荒經の四方神は36章本の段階ですであつたが、海外經の方の四方神は海外經図72章からさらに下った現行本の段階でようやく附加されたものである。大荒經36章本成立後、海外經が成立するまでに月令に採用されることになる五神が伝播したことを示すものであろう。

海外北經の禺彊につき、郭璞は、「字玄冥、水神也、莊周曰、禺彊立于北極、一曰禺京、一本云、北方禺彊、黑身手足、乗両龍」と注する。ここに指摘されるように、禺彊は『莊子』内篇／大宗師「禺強得之、立乎北極」に見える。袁珂は、『莊子』内篇／逍遙遊「北冥有魚、其名為鯢」の「鯢」を『經典釈文』莊子音義「崔譔云、鯢当為鯨」が「鯨」とする説に注目し、北冥＝玄冥、鯨＝禺京＝禺彊とする。郭璞が禺彊を玄冥の字とすることは存外に肯綮を得ていることになる。月令に採用されることになる五神が伝播した際にも、禺彊を玄冥の別名と解して存置し、句芒・祝融・蓐收と並べたものとなるう。

	東	南	中央	西	北
大荒經	①禹虢	②不廷胡余		③弇茲	④禹彊
海外經	④句芒	①祝融		②蓐収	③禹彊
月令	①太皞	②炎帝	③黃帝	④少皞	⑤顓頊
帝					
神	句芒	祝融	后土	蓐収	玄冥

ついで問題となるのは、四方の序列である。五臧山経・海外海内経は南東西北の序列を採るが、大荒海内経では、大荒経四篇は東南西北、海内経はその内部で東南西北の序列を採る。

戦国期における四方の序列は、大まかにいえば、東西南北の「対比称呼」が先行し、戦国後期、前三世紀以降に東南西北の「環状称呼」が出現する。また東南西北以外の「環状称呼」は、東南西北に先行して出現している。⁽⁴⁶⁾⁽⁴⁷⁾

東西南北↓種々の環状称呼↓東南西北という出現の先後は、海内経（大荒海内経72章本）が東西南北、海外海内経が南西北東を用いることに対応する。大荒経四篇が東南西北の序列を採るのは、何より海内経と食い違う点からいって、現行本の段階で二次的に改変されたものとなる。同様に、現行の五臧山経が南東西北中の序列を採るのは、海外海内経成立のころに、たとえば中東西南北といった本来の序列が改変された結果であったかもしれない。いずれにせよ、東南西北の影響がほとんど認められないことは、上掲の年代観を支持する。

一体、東南西北は、つとに殷代甲骨文に見えるが、それは一旦中絶したらしく、戦国後期における出現は、おそらくは五行説・時令思想が結合した結果である。『管子』幼官／幼官図・四時・五行などの事例はそれが斉地で発生したことを示し

ている。東南西北は、『楚辭』招魂や月令および『呂氏春秋』に認められるように楚・秦には比較的早く伝来したが、『荀子』『韓非子』には見えず、三晋における受容は遅れた模様である。これもまた『山海經』の成書地域を推定する一つ材料になるであろう。

本稿では戦国後期、前二九九―前二三九年の間に『山海經』の基本的な部分が成書したものと考えたが、この推定は、それ以降の附加改変の可能性や、『山海經』の個々の記述がこの時期以前に成立した可能性を否定するものではない。またその成書地域については、宋・三晋といった中原地域が一つの候補になることを指摘しておいた。いずれにせよさらなる考察を要する。

注

- (1) 小南一郎一九八七にそれ以前の『山海經』研究史が整理されている。それ以降の日本の研究としては、松田稔一九九五・二〇〇六のほか、竹内康浩一九八七・一九九一、大野圭介一九九五・一九九八・一九九・二〇〇〇a・二〇〇〇b・二〇〇二、森和二〇〇〇・二〇〇一a・二〇〇一bなどがある。
- (2) 五藏山經の世界観に関する詳細な議論としては、森和二〇〇〇がある。
- (3) 『穆天子伝』についての近年の研究としては、大野圭介二〇〇〇a・二〇〇五がある。
- (4) 『竹書紀年』については、方詩銘・王修齡一九八一の編号を用いる。
- (5) 顧実一九三一。
- (6) 小川琢治一九二九など。
- (7) 『竹書紀年』晋紀66に、「晋烈公元年（前四一五）、趙献子城兹氏」とあるように、兹氏は趙の邑であった。漳水以南は魏の疆域に属する（譚其驤一九八二）。『穆天子伝』に兹氏から漳水までの地名が見えないことも、趙との関係を強く示唆するものとなる。
- (8) 吉本一九九八a・二〇〇五b第三章第一章。
- (9) 張培瑜一九八七。
- (10) 吉本二〇〇四。『竹書紀年』は周紀15「竹書亦曰、穆王北征、行流沙千里、積羽千里」・16「紀年又曰、取其五王以東」・17「紀年曰、穆王十三年、西征、至于青鳥之所憩」・18「紀年、穆王十七年、西征昆侖丘、見西王母、其年来見、賓於昭宮」など『穆天子伝』に重

複する内容を複数の年次に分散している。これらの年次の由来は現時点では不明とせざるを得ないが、年代記の体裁に整えるべく、二次的に創作された繫年と思われる。なお大野圭介二〇〇五によれば顧頡剛「穆天子伝及其著作時代」(『文史哲』一九五二—二)がつとに「穆天子伝」と秦趙始祖伝説・武靈王遠征との関連を論じているとのことである。

- (11) 『史記』匈奴列伝「衛青復出雲中以西至隴西」・衛將軍驃騎列伝「令車騎將軍青出雲中以西至高闕、遂略河南地、至于隴西」に見える元朔二年(前一二七)の衛青の遠征はこのルートをとったものであり、匈奴列伝「漢度河自朔方以西至今居、往往通渠置田、官吏卒五六万人、稍蠶食、地接匈奴以北」に見えるように、漢はこのルート沿いに防衛線を構築している。

- (12) 「崑崙四水説」については、海野一隆二〇〇四がある。

- (13) 『管子』地数「桓公曰、地数可得聞乎、管子対曰、地之東西二万八千里、南北二万六千里、其出水者八千里、受水者八千里、出銅之山四百六十七山、出鉄之山三千六百九山、此之所以分壤樹穀也、戈矛之所發、刀幣之所起也、能者有餘、拙者不足、封於泰山、禪於梁父、封禪之王、七十二家、得失之数、皆在此内、是謂国用」。

- (14) 郝懿行箋疏「今案自禹曰已下、蓋皆周人相伝旧語、故管子援入地数篇、而校書者附著五藏山經之末」は「周人相伝旧語」を『管子』地数が引用したものとするが、むしろ『管子』地数から引用されたものであろう。「地之東西二万八千里、南北二万六千里、其出水者八千里、受水者八千里」は、地数が後掲の『呂氏春秋』有始「凡四海之内、東西二万八千里、南北二万六千里、水道八千里、受水者亦八千里」を引用したものであろう。有始の「水道」「受水者」を地数は

「其出水者」「受水者」の対句に整えている。「封于泰山、禪于梁父、七十二家」は『管子』封禪にも見える。さらに「国用」は、『商君書』算地に見えるほかは、『管子』中匡・乘馬数・山権数・「孫子」作戦・『周礼』秋官/小司寇など齊地の文献にほぼ限って出現する。

- (15) 吉本二〇〇六a。
(16) 吉本一九九八b。
(17) 吉本二〇〇六a。

- (18) 『容成氏』については、李零二〇〇二・蘇建洲二〇〇三参照。
(19) 鄒衍の大九州説については、御手洗勝一九八四・安居香山一九六六の論争があるが、本稿では立ち入らない。

- (20) 小川琢治一九二九。

- (21) 五服説・九服説の概要については、吉本二〇〇五aを見よ。

- (22) 顧頡剛一九五九。

- (23) 『漢書』地理志/益州郡「滇池、大澤在西、滇池澤在西北、有黒水祠」の「黒水祠」はこの黒水に関わるものであろう。

- (24) 西次四経/勞山「北五十里、曰勞山、多莛草、弱水出焉、而西流注于洛」に見える「弱水」も「西流」するが、上郡の洛水に流入するもので、禹貢の弱水とは無関係であらう。

- (25) 以下大荒海内経の章番号は筆者の分章による。句読点は基本的に袁珂一九八〇に拠る。

- (26) 大荒海内経では、古帝王の系譜を記す記述が「有」を書き出しとする章に挿入されているが、海内経「炎帝之孫伯陵」以下は同じ書式でもつばら古帝王の系譜ばかりを記す。挿入する場所を得なかった系譜資料の残餘をまとめて篇末に置いたものであろう。この部分については章数に数えない。

(27) 大野圭介二〇〇b。

(28) 吉本一九九五。

(29) 袁珂一九八〇、四一七―四一八頁。

(30) 松田稔一九九五第二章第八節はすでに、大荒東経・西経の「日月所出」「日月所入」に注目し、東西各七山などの対比が意識的になされたことを推定している。

(31) 袁珂一九八〇、三五四頁。

(32) 松田稔二〇〇六上編第三章が指摘するように、昆侖・西王母の結合は降る。後述の如く、大荒海内経72章より降ると思われる海外海内経において、西王母がなお昆侖に住まうものとされていないという事実は、この西王母に関する記述が現行本大荒海内経形成の段階で附加されたことを示す。総じていえば、大荒海内経と五藏山経は対応が乏しい。傍線部eが、西次三経／玉山「西王母其状如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝、是司天之厲及五殘」・西次三経／積石山「是山也、万物無不有焉」に対応し、傍線部bが西次三経／昆侖山「神陸吾司之。其神状虎身而九尾、人面而虎爪、是神也、司天之九部及帝之囿時」に対応することは、これらが付加部分であることを傍証する。b「処之」もまた、中次八経／驕山「神鼃困処之」・中次八経／光山「神計蒙処之」・中次八経／岐山「神涉鼃処之」・中次十一経／豊山「神耕父処之」など五藏山経に散見する表現を引用したものとなる。

(33) 海内東経末尾の「岷三江」以下は畢沅以来二次的に附加された部分とされるので数えない。

(34) 松田稔一九九五、第一章第二節。

(35) 小川琢治一九二八は錯簡を指摘するが、その復元案は本稿のそれと

はかなり異なる。

(36) 海内西経「東胡在大澤東」の「東胡」が海内東経からの錯簡であることは明らかだが、同じく海内西経「大澤方百里、群鳥所生及所解、在鴈門北、鴈門山、鴈出其間。在高柳北」は、海内西経に属するものと見て問題ない。「東胡在大澤東」の「在大澤東」は、本来「在其東」にあったものが、錯簡ののち加筆されたものとなる。竹内康浩一九九一は具体的な事物を用いる形式を「プロトタイプ」とするが支持できない。

(37) 吉本二〇〇二・二〇〇六bに指摘したように、「匈奴」の称谓の確実な用例は前漢以降に降る。果たして郭璞は「一日獫狁」と注しており、本来「獫狁」と作ったものを前漢以降「匈奴」に書き直したものであろう。

(38) 「東胡」は海外西経に二見するが、吉本二〇〇二・二〇〇六bで指摘したように、「東胡」の確実な用例もまた前漢以降に降る。海外東経に見える「西胡」とともに、前漢以降の改訂を被ったものである。

(39) 田鳳臺一九八六・松田稔二〇〇六上編第三章。

(40) 論大「常祥」・大荒西経「常陽」あるいは「偏句常羊之山」。「不庭」・大荒南経「不庭之山」。「岐母」・大荒東経「皮母地丘」。「群抵」・大荒東経「孽搖類抵」。「天翟」・大荒南経「天臺高山」あるいは大荒北経「北極天櫃」。「不周」・大荒西経「不周負子」。○本味「獲獲」・南山経「灌灌」。「述蕩」・大荒南経「蹴陽」。「有鳳之丸、沃民所食」・大荒西経「有沃之國、沃民是処、沃之野、鳳鳥之卵是食、甘露是飲」。「醴水之魚、名曰朱鰌、六足、有珠百碧」・東次二経「澧水出焉、東流注于余澤、其中多珠鰌魚、其状如肺而有目、六

足有珠」。「灌木之魚、名曰鱗、其狀若鯉而有翼、常從西海夜飛、游於東海」…西次三經「觀水出焉、西流注于流沙、是多文鱗魚、狀如鯉魚、魚身而鳥翼、蒼文而白首、赤喙、常行西海、遊于東海、以夜飛」。「崑崙之嶺」…西次三經「西南四百里、曰崑崙之丘、…有草焉、名曰葦草」。「寿木之華」…海內經「靈寿實華」。「中容之國」…大荒東經「中容之國」。「嘉樹」…中次七經「嘉榮」。「招搖之桂」…南山經「其首曰招搖之山、臨于西海之上、多桂」。「崑崙之井」…海內西經「海內崑崙之虛、…面有九井、以玉為檻」。「沮江之丘、名曰搖水」…西次三經「又西三百二十里、曰槐江之山、…爰有淫水」。「高泉之山、其上有涌泉焉」…中次十一經「又東南五十里、曰高前之山、其上有水焉」。「沙棠之實」…西次三經「黃華赤實、其味如李而無核、名曰沙棠」。「有百果焉」…青島之所、有甘櫨焉」…海外北經「平丘在三桑東、爰有遺玉・青鳥・視肉・楊柳・甘祖・甘華、百果所生」…海外東經「騷丘、爰有遺玉・青馬・視肉・楊柳・甘祖・甘華、百果所生」…大荒東經「又有三青馬・三騷・甘華、爰有遺玉・三青鳥・三騷・視肉・甘華・甘祖、百穀所在」…大荒南經「有蓋猶之山者、其上有甘祖、枝幹皆赤、黃葉、白華、黑實、東又有甘華、枝幹皆赤、黃葉、有青馬、有赤馬、名曰三騷、有視肉」。

○任數「寿靡」…大荒西經「寿麻之國」。「儋耳」…大荒北經「儋耳之國」。

○求人「禹東至樽木之地」…東次三經「樽木」…大荒東經「扶木」。

「鳥谷」…海外東經「湯谷」。「青丘之鄉」…海外東經「青丘國」…大荒東經「青丘之國」。

「黑齒之國」…海外東經「黑齒國」…大荒東經「黑齒之國」。

「交趾」…海外南經「交趾國」。「羽人」…海外南經「羽民國」…大荒南經「羽民國」。「不死之鄉」…海外南經「不死民」…大荒南經「不死之國」。「三危之國」…西次三經「三危之山」。「巫山」…大荒南經

「巫山」…大荒西經「巫山」。「共肱、一臂、三面之鄉」…海外西經「奇肱之國在其北、其人一臂三目」。「犬戎之國」…海外北經「犬封國曰犬戎國」…大荒北經「犬戎」。「夸父之野」…海外北經「夸父」…大荒北經「夸父」。「禹彊之所」…海外北經「禹彊」…大荒北經「禹彊」。「積石之山」…海外北經「禹所積石之山」…海外西經「禹所導積石山」…大荒北經「禹所積石」。

(41) 郭璞は「崑崙虛北所有」を上につけるが、個々の位置を示さない以下の6章に連なるべきものとなる。

(42) 松田稔二〇〇六下編第一章第一節。

(43) 松田稔二〇〇六上編第五章第一節は屈原作とされる『楚辭』離騷・九歌・天問・九章の神話的記述を『山海經』と比較し、前者がより新しい要素を伴うことを論拠に『山海經』の『楚辭』に対する先行を主張する。しかしながら、とりわけ大荒海内經において、神話的記述は二次的付加部分に属するのであり、まずはその部分の原資料が『楚辭』より古いということになる。今一つの問題は屈原の卒年および離騷以下を屈原作とすることの信憑性である。屈原卒年については、九章／哀郢を根拠に郢の陥落した前二七八年とされることが多いが、錢穆一九五六がつとに指摘するように、『史記』屈原賈生列伝に従うならば、屈原の卒年は、楚懷王が秦に抑留された前二九九年とすべきであろう。従って九章も後人の作ということになる。

(44) 『山海經』の四方神に関する専論としては、阪谷昭弘一九九八がある。

(45) 『詩』大雅／文王有聲「自西自東、自南自北」。「礼記」檀弓上「今丘也、東西南北之人也」。「左伝」僖四「東至于海、西至于河、南至于穆陵、北至于無棣」・僖九「故北伐山戎、南伐楚、西為此会也、

東略之不知」・襄二十九「東西南北、誰敢寧処」・昭九「吾西土也、
：吾東土也、：吾南土也、：吾北土也」。『孟子』梁惠王下・滕文公
下・尽心下「東面而征、西夷怨、南面而征、北狄怨」・公孫丑上
「詩云、自西自東、自南自北、無思不服」。『莊子』內篇／大宗師「父
母於子、東西南北、唯命之從」。『楚辭』天問「東西南北、其修孰多」。
上博楚簡『容成氏』「東方之旗以日、西方之旗以月、南方之旗以蛇、
中正之旗以熊、北方之旗以鳥」。「東方為三倍、西方為三倍、南方為
三倍、北方為三倍」。

(46) 『礼記』曲礼下「其在東夷・北狄・西戎・南蠻」。『国語』齊語「地
南至於餉陰、西至于濟、北至于河、東至于紀鄒」・『管子』小匡
「地南至於岱陰、西至於濟、北至於海、東至於紀隨」・霸形「南致楚
越之君、而西伐秦、北伐狄、東存晉公於南」。『墨子』兼愛中「西為
西河漁賓、：北為防原狐、：東方漏之陸防孟諸之澤、：南為江・
漢・淮・汝」。

(47) 松田稔一九九五第四章第二節は、方位観として、東西南北の環状称
呼と東西南北の対比称呼を対置し、それぞれ殷・周に由来するもの
で、『山海経』が環状称呼に従うものとするが、少なくとも現行本海
内経の東西南北には妥当しない。また同じく環状称呼でも南西北東
と東西南北の相違は説明されていない。

引用文献

【日文（著者名五十音順）】

大野圭介一九九五「劉歆『上山海経表』をめぐる」、『中国文学報』五一、
一～二七頁。

——一九九八「『山海経』海内四経の成立」、『富山大学人文学部紀要』
二八、一七七～一九六頁。

——一九九九「『山海経』大荒・海内経原始」、『富山大学人文学部紀要』
三〇、一三八～二五八頁。

——二〇〇〇a「爰に理想郷有り——『山海経』と『穆天子伝』の「爰
有」——」、『興膳教授退官記念中国文学論集』、七一～八六頁、汲古書
院。

——二〇〇〇b「『山海経』海外四経原始」、『富山大学人文学部紀要』
三三、一三三～一五八頁。

——二〇〇二「古代中国における地理認識」、『富山大学人文学部紀要』
三七、一三〇～一五六頁。

——二〇〇五「『穆天子伝』研究序説」、『桃の会論集』三、一三～二一
頁。

海野一隆二〇〇四「崑崙四水説の地理思想史的考察——仏典および旧約聖
書の四河説との関連において——」、『東洋地理学史研究 大陸篇』、三
一～四六頁、清文堂出版。

小川琢治一九二八「『山海経』の錯簡」、『支那歴史地理研究』、一三〇～一四
六頁、弘文堂書房。

——一九二九「周穆王の西征」、『支那歴史地理研究続集』、一六五～四
〇八頁、弘文堂書房。

小南一郎一九八七「『山海経』研究の現状と課題」、『中国——社会と文化』
二、二二〇～二二六頁。

阪谷昭弘一九九八「『山海経』四方神考」、『学林』二八・二九、二五～四
四頁。

竹内康浩一九八七「後漢時代における『山海経』——現行本の成立の問題

について―、秋月観暎編『道教と宗教文化』、六一―八〇頁、平河出版社。

―一九九一「海外諸経の成立―『山海経』現行本の成立の問題について(2)―」、『史流』三一、二三―五四頁。

松田稔一九九五『『山海経』の基礎的研究』、笠間書院。

―二〇〇六『『山海経』の比較的研究』、笠間書院。

御手洗勝一九八四「鄒衍の大九州説と崑崙伝説」、『古代中国の神々』附録一(六五三―六八一頁)、創文社。

森和二〇〇〇『『山海経』五蔵山経の世界構造』、『史滴』二二、二―二七頁。

―二〇〇一a『『山海経』五蔵山経における山岳神祭祀』、『日本中国学会報』五三、一―一五頁。

―二〇〇一b『『山海経』五蔵山経における崑崙之丘』、『史滴』二三、八九―九四頁。

安居香山一九六六「緯書における地理的世界観―特に大九州説について―」『緯書における大九州説―特に御手洗勝氏の批判に答えて―』、

安居香山・中村璋八『緯書の基礎的研究』第六章(二〇一―二二七頁)・第七章(二一八―二四〇頁)、国書刊行会。

吉本道雅一九九五「曲礼考」、小南一郎編『中国古代礼制研究』、一一七―一六四頁、京都大学人文科学研究所

―一九九八a「秦趙始祖伝説考」、『立命館東洋史学』二二、一―四四頁。

―一九九八b「史記戦国紀年考」、『立命館文学』五五六、一―七六頁。

―二〇〇二(金啓琮訳)「匈奴初見考」、『愛新覚羅氏三代阿爾泰学論

集』、一九七―二二四頁、明善堂。

―二〇〇四「西周紀年考」、『立命館文学』五八六、一八―五七頁。

―二〇〇五a「中国戦国時代の天下観念」、『東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究 ニューズレター』三、三―五頁。

―二〇〇五b「中国先秦史の研究」、京都大学学術出版会。

―二〇〇六a「夏殷史と諸夏」、『中国古代史論叢 三集』、一―三〇頁、立命館東洋史学会。

―二〇〇六b「史記匈奴列伝疏證―上古から冒頓単于まで―」、『京都大学文学研究科紀要』四五、三三―八三頁。

【中文(著者名拼音順)】

譚其驤一九八二『中国歴史地図集』一、地図出版社。

方詩銘・王修齡一九八一『古本竹書紀年輯證』、上海古籍出版社。

顧頡剛一九五九「禹貢」、侯仁之主編『中国古代地理名著選説』、一―五四頁、科学出版社。

顧実一九三一『穆天子伝西征講疏』、中国書店、一九九〇。

李零二〇〇二「容成氏」、馬承源主編『上海博物館藏戰国楚竹書(二)』、

二四七―二九三頁、上海古籍出版社。

錢穆一九五六『先秦諸子繫年』、香港大学出版社。

蘇建洲二〇〇三「〈容成氏〉訳釈」、季旭昇主編『上海博物館藏戰国楚

竹書(二)』読本』、一〇三―一八二頁、万卷楼。

田鳳臺一九八六『呂氏春秋探微』、学生書局。

袁珂一九八〇『山海経校注』、上海古籍出版社。

張培瑜一九八七『中国先秦史曆表』、齊魯書社。